

二〇一六年一月一日

稜線を越えてなだれ来時雨雲
出入りは慣れし裏木戸実千両
一願の柏手高く初詣
といふまに吾はや卒寿屠蘇の酔
ごまめみな背筋をピンと姿よし

豆狸

あさこ

宏虎

あさこ

ぼんこ

二〇一五年二月三日

ふる里に姑と二人除夜迎ふ
きんとのついでに少し焼き芋も
門先を掃いて了とす年用意
駆け足で買物すます大晦日
大空を席卷したる冬の鳶
神鈴の鳴りやむ間なし初詣

智恵子

こすもす

うつぎ

ともえ

とろうち

宏虎

二〇一五年二月二十九日

黙々と指先忙し蟹せせる
数え日の漁港湧きたつ糶り場かな

宏虎

よし女

二〇一五年二月二十八日

大仰に水しぶきたて鴨着水
冬の朝箸墓古墳は靄の中
富士仰ぐ頬さす風の寒さかな

泰山

明日香

智恵子

古びたる七輪出番牡蠣を焼く

菜々

手の届く所々に物ある炬燵かな

とろうち

焚火して大漁船を待ちにけり

三刀

二〇一五年二月二十七日

数え日やデマに花咲く散髪屋
ひとつまた一つメモ消し年用意
同乗者驚かしたる大噓
老若の火の用心の声揃ふ
煤逃げはもつてのほかや介護妻

宏虎

うつぎ

さつき

満天

はく子

二〇一五年二月二十六日

朝日さしキャベツ畑は渦の花
万歳をしてをるとき大枯木
タンカーの影へと垂るる冬銀河
年用意夫に託してヨガ通ひ
裸木を抱擁せんと朝日燦
橋脚のあらはとなりて川枯るる
愚痴もらす女香具師や果大師

三刀

泰山

宏虎

満天

ひかり

とろうち

なつき

毎日句会みのる選・二〇一六年一月三日